

佐々木閑さん

(仏教学者・花園大学教授)

まったく違った道を歩もう

日本を一人の人間として見たとき、重篤な病を抱えてしまった人ということが出来るだろう。それは絶望なのかといえば、そうではない。ある種の諦観と悲しみを抱えた成熟ともいえる。そうした状態だからこそ他者への眼差しも温かいものとなる。仏教学者の佐々木閑さんに聞いた。

日本が背負ってしまった「苦」

十六年前、阪神・淡路大震災とオウム真理教による無差別テロが起きたとき、「日本は何かが変わらねばならない」と思いました。同様に今回の大震災も、暮らしや社会の在り方を問う、決定的な何かになると思うのですが。

阪神・淡路大震災は局所的かつ一過性の災害で、時間がかかるにしても復興できることがわかっていました。オウム真理教も、国家を破壊するだけの威力は持

っていないかったので、危ない連中がいるという程度の認識で終わったようです。

しかし今回は何といっても放射能のことがあります。放射能の被害は、回復するのに数万年という単位で語られる問題です。しかも事故発生後から悪いほうへと向かうばかりで、苦しみの終わりが見えない。そこが阪神・淡路大震災やオウム事件と、本質的に違うところだと思います。

原発の問題は、最先端の技術をもつてしても解決に至らないかもしれないという指摘もありますし、私は関西に住んでいます。関西にあっても、徐々に退路

を断たれていくような閉塞感を感じます。

私は、この状況は、釈迦が出家に至った状況とぴったり符合するという見方をしています。王子として不自由な生活を送っていた釈迦は、「老・病・死」という根本的な問題を目の当たりにして、いてもたってもいらなくなつて出家する。つまり二千五百年前の釈迦も、いまの日本も、「一切皆苦」を肌で感じてしまったのです。物理的な復興はもちろん重要ですが、



●ささき・しずか 1956年福井県生まれ。京都大学工学部および文学部哲学科仏教学専攻卒業。京都大学大学院文学研究科博士課程退学後、米国カリフォルニア大学バークレー校留学。インド仏教学、仏教史専攻。著書に『出家とはなにか』『犀の角たち』『インド仏教変移論』（大蔵出版）、『鈴木大拙 大乘仏教概論』（訳・解説 岩波書店）、『日々是修行 現代人のための仏教100話』（ちくま新書）、『「律」に学ぶ生き方の智慧』（新潮選書）など。

たとえそれができたとしても、原発のことを考えれば、日本が背負ってしまった「苦」は決してなくなるらない。釈迦は、苦しみの中で生きていくには、自分の心を変えるしかないと言いました。つまり、私たち一人ひとりがものの見方を変えて、苦しみを受け入れるしかないのです。そして、いままでの考え方のどこに間違いがあったのかを把握し、同じ間違いを二度としないようにする。さらに何に価値を見出すべきかをよく見極める。三・一一以前なら、これはただの建前としてしか響かなかつたでしょう。しかし、いまとなつてはそれしかないということが、日本人には身にしみてわかるのではないのでしょうか。

この世がどんなに明るく希望に満ちたものだと思ひ込もうとしても、現実には苦である。これが「一切皆苦」です。苦しみの原因は、「老・病・死」。人はふだん、それを忘れたり、ごまかしたりしようと努めているわけですが、しかしそれを認めざるをえない現実がつきつけられたとき、私たちは苦しみの前で悶えることしかできません。

苦しみの原因が「老・病・死」であるならば、物理的にこれを防止・阻止する手段を模索する手があります。